

# ベートーヴェンの歌曲についての研究

上田浩平

## Study on Beethoven songs

Kohei UEDA

### Abstract

Known as “Symphony No. 9”, Beethoven is famous as a composer of piano works and symphonies, but has left many songs. Unfortunately, there are only a limited number of works performed today, but by studying Beethoven's songs that had a great influence on Schubert and Schumann, it will be a great help when singing songs by various composers in the future. I think.

Key wards: Beethoven songs

#### 1. はじめに

私は、学生に指導する立場として、専門分野の技術向上を常に図り続けることを大切にしたいと考えている。私の専門である声楽を研究する上で、日本の音楽教育に大きな影響を与えたドイツ音楽を外すことはできない。そして、その代表的な作曲家がベートーヴェンである。日本では、「第九」と称されて愛されている「交響曲第九番」が有名であるが、その他の作品を考えると、ピアノ作品が取り上げられることが多い。しかし、ベートーヴェンは声楽作品である歌曲も数多く残している。その数は 100 曲とも言われているが、現在の日本で演奏される機会は決して多くない。

歌曲、いわゆる「リート」は19世紀初頭に、ドイツで新しい、独自の楽曲形式として姿をあらわしたといわれている。そしてその歴史の中で、有節形式・通作形式・連作歌曲集形式と様々な変遷をみせ、オーケストラ伴奏付きのものまで、形式的にも、内容的にも新しいリートを生み出している。そうしたリートの発展の歴史の中で、ベートーヴェンの連作歌曲集《遙かなる恋人に》はそれまでに無かった連作的要素の詩に、密接した連作的音楽をつけることにより、その後のシューベルトやシューマンの連作歌曲へ大きな影響を与えた。声楽史上、非常に大きな貢献を残したベートーヴェンの作品を研究することにより、その後のシューベルトやシューマンのドイツ・ロマン派へと繋がる声楽作品の演奏、及び楽曲解釈に大いに役に立つと考えられる。そしてこの研究を、今後のドイツ・リートの演奏に活かすとともに、学生への指導に還元したいと筆者は考える。

## 2. ベートーヴェンの生涯と声楽作品について

また今回は、ベートーヴェンが声楽作品の創作において、その生涯と強く密接しているため、彼の生涯にも、大きくスポットをあてることとする。本論文では、ベートーヴェン研究では一般的な生涯の区切りである「ウィーン初期」、「中期」、「後期」と区切ることをせず、声楽作品の創作時期と彼の生涯を比較し、「ボンからウィーン時代期」、「名声の確立期」、「不滅の恋人期」、「晩期」と独自の生涯期を設定することとする。また、これまでベートーヴェン研究では器楽作品が多く取り上げられてきたため、今回、声楽作品を中心に研究することで、新たなベートーヴェンの人間像がみえてくるのではないかと考える。現在、彼の声楽作品はオペラ《フィデリオ》や《莊厳ミサ》などをいれると352曲に及ぶと言われている。そして、そのほとんどが1785年から1823年と、彼の創作人生のほとんどに亘っている。しかしながら、器楽作品の研究や著作に対し、声楽に関するものは歴然と少ない。そして、その声楽作品の中でも最も数が多いリートについては、極めて扱いが乏しい。確かに、ベートーヴェンが器楽作品において優れていることは間違いない。不滅の個性を発揮したといえるだろう。しかし、それゆえに、歌曲作品は簡単に不当な評価をされることにもなっているのではないか。

そこで今研究では、まず歌曲に焦点をしぼりベートーヴェンのリートの中で、演奏される機会が特に多いと考えられる4曲、《アデライデ》、《君を愛す》、《想い》、《口づけ》を取り上げ、ベートーヴェンの歌曲の魅力に迫りたいと考える。

### (1) ベートーヴェンの生涯

ベートーヴェンの生涯とその作品を考えた時、3期に区切ることができると、1828年にシュロッサーニによって示されたが、その後の1837年にフェティスがこれに引き継ぎ、さらに1852年にレンツもこれを詳細に証明した。現在では「ウィーン初期」、「中期」、「後期」と区切るのが一般的であるが、今回この論文では声楽作品を中心として述べるに至り、4期に区切ることとする。

まずは、家系と幼少期からウィーン様式を自分のものにするまでの 1802 年を「ボンからウィーン時代期」。そして、いわゆる「中期」とされる 1803 年から 1811 年は彼の音楽人生の中で最も飛躍した期間であるため「名声の確立期」とする。次に私は、ベートーヴェンが声楽作品を作曲する上で大きな転機となった 1812 年から 1816 年までの「不滅の恋人期」をひとつの区切りとすることにした。そして最後に 1817 年以降の「晩期」である。

### 【ボンからウィーン時代期】

宮廷楽長でバス歌手の祖父、宮廷テノール歌手の父と続いた音楽一家の次男としてボンで生まれたベートーヴェンは、6 歳から音楽教育を受ける。父ヨハン・ヴァン・ベートーヴェンと母マリア・マグダレーナの間には 7 人の子どもが生まれる。しかし、成人したのは作曲家となったベートーヴェンと二人の弟カールとヨハンだけであった。

1778 年 3 月 26 日に父ヨハン・ヴァン・ベートーヴェンが主催する演奏会で公開演奏会デビューを果たす。その後、宮廷オルガニストの老師ヴァン・デン・エーデン、トビアス・フリードリヒ・プファイファーにクラヴィーアを師事する。また、宮廷楽師のフランツ・ゲオルク・ロヴァンティーニにヴァイオリンとヴィオラを、フランツ・リースにヴァイオリンを師事。そして、フランシスコ会教会のヴィリバルト・コッホからもオルガン奏法の指導を受けていた。このことによりベートーヴェンは 10 歳頃よりミノリーテン教会の早朝ミサでオルガン奏者を務めるようになる。

ボン時代の最も影響を受けた師としては、作曲家でオルガニストでもあったクリティアン・ゴットロープ・ネーフエ(1746~1798)があげられる。宮廷オルガニストのヴァン・デン・エーデンの後継者としてボンに招かれたネーフエに、クラヴィーア奏法とオルガン奏法、そして通奏低音法と作曲法を学ぶ。1787 年に、当時ボンで教育普及と芸術文化の振興に力を注いでいた選帝侯マックス・フランツにより、ウィーンに派遣される。

しかし、母親の病の知らせを父から受けた当時 16 歳のベートーヴェンが、ウィーンに滞在したのはわずか 2 週間程度だった。そのため、ウィーン訪問の目的であったモーツァルトとの会見が出来たかは不明である。そして、ウィーンから帰郷した 2 ヶ月後に母マリアは他界する。妻に先立たれた父ヨハンは、宮廷テノール歌手としての仕事への情熱も失い、飲酒でストレスを紛らわすようになっていった。ベートーヴェンはこの頃より、家長的自覚が芽生え、弟たちの面倒をみるため宮廷第二オルガニストとして仕事復帰した。それと同時に、ボンの貴族の子弟たちにピアノを教えて収入を得るようにもなった。そんな中、1784 年からピアノのレッスンをしていたブロイニング家は特別であったと考えられる。ボンの名門貴族であったブロイニング家には 4 人の子どもがおり、ベートーヴェンは彼らにピアノを教えており、その中でも長女のエレオノーレはベートーヴェンの初恋の相手だったと考えられている。また、次男のシュテファンは生涯にわたる親友であった。ボン時代のベートーヴェンにとってブロイニング家の姉弟たちは気の置けない友人であった。またブロイニング家は多くの文化人や貴族のサロンとなっており、ヴァルトシュタイン伯爵(1762-

1823)ともここで知り合っている。このヴァルトシュタイン伯爵は、大変な音楽愛好家であり、この後にベートーヴェンの有力な後援者となる。1789年、ベートーヴェンはボン大学に入学し哲学・文学・芸術史を中心に学ぶ。そして入学した頃、パリで民衆が蜂起したフランス革命が勃発する。ベートーヴェンも影響を受け、その後の人間形成に大きな影響を与えた。また、この頃ウィーンから来たヴァルトシュタイン伯爵とともに、1787年に設立されたボン読書協会にも影響を受ける。大学教授たちが中心となっていた読書協会では、ベートーヴェンが晩年作曲した「交響曲第九番」終楽章の合唱テキストのシラーの《歓喜に寄す》の詩との出会いもここである。また1789年には、当時、国民劇場のオーケストラは宮廷楽団が担当することが一般的であることから、ベートーヴェンもヴィオラ奏者と通奏低音奏者として《後宮からの逃走》、《ドン・ジョヴァンニ》そして《フィガロの結婚》のボン初演に参加する貴重な体験をしている。その後、ヴァルトシュタイン伯爵との出会いや、メルгентハイムでの音楽家たちの出会いにより受けた音楽的刺激を、創作の源動力とした。

1792年には、ハイドンが認めた青年楽師として、またボンの宮廷楽師としてウィーンに派遣される。この頃にはハイドンによる対位法のレッスンも受けていたとされる。そして、ハイドンがロンドンへ出発すると、当時有名な理論家であったヨハン・ゲオルク・アルブレヒツベルガーのもとで、調性和声と調性対位法を学んだ。このことは、作曲法を学びながら作曲をし始めていたベートーヴェンにとって、新しい表現技法や形式などの実践的に学ぶことができる貴重な体験となった。実際にこの頃のベートーヴェンは多くの作品を残している。その1曲が《アデライデ》である。また当時のウィーンはイタリア・オペラへの関心が非常に高く、1799年から1801年まで宮廷楽長アントニオ・サリエリにイタリア語歌曲と作曲法を学んだ。この頃にあると、ピアニスト・ベートーヴェンは不動の人気を博し、弟子入りを希望する貴族弟子が跡を絶たなかった。1799年5月にはハンガリーの名門貴族ブルンスヴィック家の長女テレゼと次女ヨゼフィーネに短期間ではあるがピアノを教えている。その後2人の姉妹がウィーンに出てくる際には、宿泊先のホテルまで出向き、レッスンをしている。そして、モーツァルトやハイドンの音楽を最上のもとするウィーンで、作曲家として地位を築くには交響曲やオペラの創作をしなければならなかった。

当時ウィーンでもピアニストとしても活動をし始めていたベートーヴェンは、リヒノウスキー邸サロンで行われていたコンサートに出演しており、自作作品を発表する大切な場であった。それと同時に、モーツァルトにピアノを習っていたリヒノウスキー侯爵とその夫人マリアがモーツァルトにピアノを習っていたこともあり、コンサートには若い音楽家たちが常連として出演していた。また、教養ある多くの選良貴族や文化人との交流の場となっており、ベートーヴェンの卓越したピアノ演奏は多くの音楽愛好者を魅了し、ウィーンでの知名度を急速に高めることとなった。そしてこのリヒノウスキー侯爵から、年金600フローリンを1800年から給付されることとなった。この経済保障は、ベートーヴェンに精神的安定と作曲家としての自信をもたらしたことであろう。そして、この年にブルンスヴィック姉妹とは従姉妹にあたるユリア・グイッチャルディ(愛称ジュリエッタ)が弟子入りする。そ

して、ベートーヴェンは一時期彼女に恋愛感情を抱くこととなった。しかし、当時 17 歳だったジュリエッタとの年齢の差、身分の違いも自覚しており、結婚が実現するとは考えていなかった。1801 年には心身的な苦痛を親友であり医師でもあるヴェーゲラーに宛てた手紙で述べている。すでにこの頃には内臓の不調と共に、難聴が悪化していた。またこの年、カール・チェルニーとフェルディナント・リースが弟子入りする。後に、この 2 人はベートーヴェン研究に大きく貢献することとなる。なお 1801 年は、ピアノ・ソナタが多く作曲された年でもある。

1802 年、ポンの宮廷楽士のアントン・ライヒャとボン大学で共に学んだ以来、10 年ぶりの再会を果たしている。このことをきっかけに再会後は、多くの作品を仕上げている。特に声楽作品においては、一流作曲家たるものオペラの傑作を書かなければならないとされていたため、ベートーヴェンもイタリア語によるシェーナやアリアを作曲している。1802 年 10 月 6 日と 10 日、ウィーン郊外のハイリゲンシュタットから弟たちに宛てて手紙を書いている。これが一般に呼ばれている「ハイリゲンシュタットの遺言」である。ベートーヴェンの死後、他の書類とともに書斎机の引き出しの奥から発見されたものであり、弟たちがベートーヴェン生存中に読んだ可能性は少ないとされている。2 回に分けて書かれたこの「遺言」は決して絶望の中書かれたものではなく、弟たちへの愛と感謝、そして、ベートーヴェンの揺れ動く激しい心情が良く表されており、死の恐怖と闘いながら強く生き抜こうとする意志が伝わってくる恋文である。

### 【名声の確率期】

音楽家として誰にも打ち明けることのできない病を抱えたベートーヴェンの心情は、図り知れないものであると考えられる。「ハイリゲンシュタットの遺言」を書き終えたベートーヴェンは、その直後にウィーンに戻り死の恐怖を克服している。あるいは、この「遺言」を書くことによって、自らに言い聞かせることにより克服できたのかもしれない。

1803 年、エマヌエル・シカネーダーからのオペラ作曲依頼を受け、彼が支配人を務めるアン・デア・ウィーン劇場の 2 階の居室に弟カールと住むことになった。それから 1804 年のシカネーダーが劇場を解雇になるまでの間、《ヴェスタの火(未完成)》や《レオノーレ(1805 年完成)》などオペラ制作に意欲的に取り組むと同時に、劇場の慈悲演奏会に曲を提供し演奏する機会を得ることとなる。しかしシカネーダーの解雇により、ベートーヴェンも劇場内の住居を引き払うことになり、当時、軍事局法務担当者としてウィーンに住んでいた親友シュテファン・ブロイニング家にお世話になることとなる。だが、半年もしない間にベートーヴェンのだらしない生活態度をめぐりシュテファンと仲たがいがいし、パーデンへと出かけてしまう。その後シカネーダーがアン・デア・ウィーン劇場の芸術監督に復帰し、ベートーヴェンとのオペラ契約も復活する。同時にベートーヴェンがシュテファンに許しを請い仲直りしている。一方、シュテファンがヴェーゲラーに送った手紙から、ベートーヴェンがかつてのピアノの弟子だったヨゼフィーネに恋をしていたことが分かっている。1804 年の秋か

ら 1806 年の秋までにベートーヴェンはヨゼフィーネに 13 通の恋文を送っている。そして、この恋が高ぶると同時に再びオペラ創作への意欲も取り戻していた。シカネーダーの復帰により、アン・デア・ウィーン劇場の 2 回の居室が再度使用できるようになる。そこで、1805 年にはヨゼフィーネのために、詩集『ウラーニア』から選んだ《希望に寄せて》を作曲。同時に《レオノーレ》の上演に向けて日々を過ごすベートーヴェンであったが、ナポレオン軍の侵略によりウィーンの街も恐怖に怯えるようになり、裕福な貴族階級や銀行家などがウィーンから避難するようになる。そんな社会情勢の中、ウィーン占領軍であるフランス兵たちの前で《レオノーレ》はベートーヴェンの意に反して《フィデリオ》のタイトルで、ドイツ語で上演された。そのため観客のほとんどが内容を理解することができず、楽しめる聴衆はごく僅かとなった。公演は、3 回目が終わった際にベートーヴェンが自ら楽譜を回収し打ち切った。しかし公演打ち切り後に、弟カールや、親友シュテファン、詩人のコリン、劇場監督マイヤーなどとオペラ全体を通しての検討会が行われ、アリアを削除するなどの大改訂案が示された。

1806 年 3 月に改訂版の初演を迎えるも成功を得ることは出来なかった。アン・デア・ウィーン劇場での慈悲演奏会への出演や作品提供は、たとえ収益がなくても、劇場を演奏会会場として借りるためには、慈悲演奏会での実績が必要であり、自ら主催のアカデミーを開催することを嘆願していたベートーヴェンにとっては重要なことであった。そして、その貢献が認められ、1808 年 12 月 22 日にベートーヴェン主催のアカデミーが開催された。残念ながら、このアカデミーでは、最後の演目《合唱幻想曲》でベートーヴェンの失敗により演奏を中断し、最初から演奏し直すというハプニングがあったとされている。このことを機にウィーンを離れようとするようになる。ウィーンを離れようとするもう 1 つの理由として、カッセル宮廷の第 1 宮廷楽長への就任要請があったからである。しかし、周りの友人の説得もあり、ウィーンに留まることになった。

1809 年 3 月 1 日、ルドルフ大公、ロプコヴィツ候、フェルディナント・フォン・キンスキー侯爵の 3 名が契約書に署名し、年金 4000 フローリンを分担で支給することとなり、ベートーヴェンは半年毎に半額を受給することになった。再び経済的安定が保証されたことで、ベートーヴェンは創作意欲を取り戻す。《ピアノ・ソナタ「告別」作品 81a》、《ピアノ協奏曲第 5 番変「ホ長調」作品 73》などが作曲される。一方、《交響曲第 5 番「ハ短調」作品 67》、《交響曲第 6 番「田園」作品 68》がブライトコップフ・ウント・ヘルテル社から初版刊行された。また歌曲では《想い》が作曲され、いわゆる〈傑作の森〉と呼ばれる大量創作の年となる。しかし、この年の 5 月にはナポレオン軍の占領により、ウィーンを完全包囲される。5 月 13 日にナポレオン軍の戦勝入場式が行われた。フランス兵が街を行き交うことを嫌ったベートーヴェンは、自由に散歩に出かけることができなくなってしまった。大自然の中を散歩することを好み、散歩中に浮かんでくる楽想を書きとめることが習慣だったベートーヴェンにとって、これは精神的に大きな苦痛であった。また、時ほどなくして、ハイドゥンが 77 歳の生涯を閉じる。この頃のベートーヴェンの聴覚は、アンサンブルが困難な

状態にまで衰えていた。10月になるとオーストリアとフランスとの間で平和条約が締結され、フランス軍が徐々に撤退するとともに、疎開していた多くの人々が年末にかけてウィーンに戻って来た。1810年の年明けには貴族たちも戻って来て、平安な日常に戻りつつあった。ベートーヴェンも健康を取り戻していった。

戦争で休演していた劇場運営を立て直すため、舞台興行を企画しブルク劇場でゲーテ作の悲劇《エグモント》を上演。そしてこの《エグモント》を作曲している最中、ベートーヴェンは友人グライヒェンシュタインの紹介でテレゼ・フォン・マルファッティ嬢に会い、夢中になっていた。そして、コブレンツに住むヴェーグラーに、ボンまで行って自分の洗礼証明書を手に入れて欲しいと嘆願している。テレゼとの結婚を考えていたことは間違いないのではないか。結婚まで考えた恋ではあったが、これも短い片想いで終わってしまう。この年の5月に、ゲーテを崇拜していたベッティーナと出会う。そして、ベッティーナの兄であるフランツ・ブレンターノとその妻アントーニアとも知り合う。また、ベッティーナを通してゲーテの様子をベートーヴェンに伝えられることとなり、当時はまだ《憂いと喜び》、《憧れ》の2曲のみのものに《彩られた1本のリボンで》が8月に加えられ、《ゲーテの3つの歌曲》作品83が完成する。また、春から夏にかけて、ベートーヴェンは頭痛に悩まされることが多くなっていた。そこで7月より10月中旬ごろまで、バーデンにでかけ温泉保養をしている。その間、53曲のイギリス民謡の編曲を行っている。さらにその頃は、ピアノ作品や室内楽の作品が生まるなど、決して創作を止めることはなかった。

### 【不滅の恋人期】

1812年の7月2日、ベートーヴェンはテープリッツへ向かう途中、プラハに立ち寄り旧友ファルンハーゲンとあい、翌日の晩に食事の約束をしている。しかし3日の夕方、ベートーヴェンは約束の場所に現れなかった。実はこの日、ブレンターノとその妻アントーニア一家がカールスバートへの家族旅行の中継地としてプラハに宿泊していた。3日にブレンターノ家の人々と一緒だったかは不明であるが、ベートーヴェンがウィーンを経つ数日前にブレンターノ家を訪ねており、カールスバート旅行のことは知っていたとしても不思議ではない。翌4日にはそれぞれの目的地へ向かい、5日にはそれぞれ到着している。

この年は1つベートーヴェンにとって忘れられない出来事がある。ゲーテとの出会いである。当時ナポレオン軍がヨーロッパ統一を目指し、モスクワ侵攻中であつた。テープリッツはウィーンとベルリンの中間であり、戦争の中立地域だったため、ヨーロッパ各地の王侯貴族や文化人たちが集まっていた。そこに、ゲーテも訪れていたのであつた。そして、9月には「不滅の恋人」説であつた当時のスター歌手アマリエ・ゼーバルトと出会う。若くて美しいアマリエにベートーヴェンが関心を持たなかったはずはない。しかし、二人の交流はごく短期間だけであり、「不滅の恋人」説は無くなった。

すでに1812年の《ウェリントンの勝利》や《交響曲第7番「イ長調」》の成功で、ベートーヴェンの人気は高まっていた。そして1813年6月には、音楽面のすべての改訂が終わ

っていたオペラ《フィデリオ》の初演が始まり、当時の社会情勢あり、1ヶ月のうち6公演も行われる大成功を収めた。

これまでブライトコップフ・ウント・ヘルテル社から出版してきたベートーヴェンだが、年金収入だけでは解決できない経済的苦境を改善するために、地元ウィーンのアントン・シュタイナー社から出版するようになる。弟カールに経済援助をおこなうため、シュタイナー社から借金をしたのである。そのため、《ウェリントンの勝利》や《アデライデ》などの出版権をシュタイナー社に譲渡した。シュタイナー社では、パート譜やスコア譜を出版し始め、ベートーヴェンの作品の普及に大いに貢献することとなった。その他、ピアノ・ソナタの12曲の出版権もシュタイナー社に譲渡し、1811年から1815年までの間に《交響曲第7番》、《交響曲第8番》、《ピアノ三重奏》、《ヴァイオリン・ソナタ第10番》、など多くの作品の出版権を譲渡したのである。この相次ぐ出版に、ベートーヴェンは大きな満足を得ていた。しかしこの年の秋、弟カールの病状が悪化し、他界する。カールは遺書で遺児カールの後見人としていたが、副後見人となっていたカールの妻ヨハンナが不服を申し立てた。しかし、ベートーヴェンがこれに不服申し立てを行い、上訴した。

1816年は、甥カールの後見人問題で幕開けとなった。結果は伯父であるベートーヴェンが単独後見人となった。甥カールを自分の理想で育てようと、ウィーンの私立学校に入学させる。そして、教養を高めるために、チェルニーのピアノのレッスンを受けさせた。弟カールの死により、ベートーヴェンの日常は大きく変化することとなった。甥カールとの生活を優先し、常に父親の役割を果たそうと努力した。その結果、大作に取り組むことなく時間が過ぎていった。また同時に、ベートーヴェンの周りにいた友人が次々とウィーンを離れている。離れていく友人に、ベートーヴェンは曲をプレゼントしている。そうした生活の中でも春には積極的に創作を進めている。その時に作曲されていたのが連作歌曲集《遙かなる恋人に》である。またこの年は、ソナタにおいて全く新しい主題法と楽章構成を打ち出した様式転換を示す作品が作曲された年でもあり、多くの器楽作品が完成し、出版された年である。10月初旬より体調が悪化をはじめ、夏から滞在していたバーデンからウィーンへ戻っている。ウィーンに戻った翌日より高熱と激しい腸カタルに苦しみ、11月初旬までほとんど外出することもできなかった。そしてこの年の最後にはロプコヴィッツ侯が逝去する。連作歌曲集《遙かなる恋人に》を贈ることで、生前に侯から受けた恩恵に対する感謝の意を表した。ロプコヴィッツ侯爵家からの終身年金は侯の相続人より保証された。

#### 【晩期】

1817年5月、ベートーヴェンは保養を兼ねてハイリゲンシュタットに出掛ける。その後7月にウィーンに戻る。8月にウィーンを訪れていたロンドンの有名ピアノ製作会社ブロードウッド&サンズのトーマス・ブロードウッドの訪問を受ける。また秋にはメルツェルが考案した音楽テンポ表示器メトロノームを絶賛し、既に作曲していた8曲の交響曲に最適なテンポを付け、速度表の一覧を発表する。1818年の年明けに、トーマス・ブロードウッド

よりピアノを寄贈される。この頃には、ベートーヴェンの体調も悪化していた。しかし、トーマス・ブロードウッドのピアノが届いたことで作曲中だった《ハンマークラヴィーア・ソナタ》を完成させるべく創作を進める。一方甥カールは、勉強に熱心ではなく、素行や言動が不道德であるという理由で退学処分となっている。そしてこの年の12月、甥カールはベートーヴェンのもとから逃げ、実母ヨハンナのもとに戻ってしまう。ベートーヴェンは一度は甥カールを取り戻すも、再びヨハンナの訴えにより裁判となる。その際にベートーヴェンの氏名にある[van ヴァン]はドイツ語で貴族出身の称号となる[von フォン]とは全く意味が異なることが判明し、ベートーヴェンは名誉と誇り、自尊心を一瞬にして崩されてしまったのである。

翌年、ベートーヴェンは甥カールの後見権を剥奪されてしまう。1821年の夏には、更なる健康低下に恐怖を覚え主治医であるヤコブ・シュタウデンハイムに診察を受ける。9月からバーデンで療養に入る。その後体調は改善し、創作が進み《ミサ・ソレムニス》の作曲に加え、最後の2曲のピアノ・ソナタの作曲にも着手している。1823年、この頃のベートーヴェンは補聴器の使用や筆談をしなければならぬほど病状が悪化していた。そして、この年の10月には《交響曲第九番》の終楽章の完成に向けて集中していた。1824年2月に完成するも、当時はロッシーニのオペラが人気を博しており、ソリストの決定に時間を要した。そして5月に初演を迎え、大成功を取める。

1826年、甥カールがバーデン近郊で自殺未遂をし、ベートーヴェンを愕然とさせる。当時、自殺行為は神への冒瀆とされ重刑が決まっていた。その後、回復したカールは自身の希望で軍人となる。翌年の1月、軍隊入隊のためカールがボヘミアへと旅立つ。この頃のベートーヴェンは甥カールのことでいっぱいであった。しかしこの頃になると小康状態を保つのがやっとになっており、かつての秘書役であったシンドラーが戻ってきて、弟ヨハンと交替で身の回りの世話や看病をしていた。

ベートーヴェンの重態が噂され、多くの人がベートーヴェンを見舞いに來た。気分が良い日は『ヘンデル全集』を手にとっていたという。きっと作曲へのヒントを探していたのであろう。3月に入るとボヘミアの甥カールから見舞いの手紙が届く。どんなに嬉しかったのであろうか。また、シューベルトも病床を見舞っている。3月24日からこん睡状態に入り、26日、早春の雪が舞う中、春の嵐の日に、2日ぶりに目を覚ますと右手拳を振り上げながら一点を見つめ、手を下すと同時に永眠した。56年と3ヶ月の生涯である。

## (2) ベートーヴェンと歌曲

18世紀末から19世紀に初頭にかけてのドイツの歌曲には、曲種や形式についての厳密な区別はなくなっていた。一般的に、ドイツ語の有節詩を有節形式で作曲したものを[Lied リート]と呼び、それ以外の様々な形式であるバラードやカンタータ、アリエッタなどを[Gesang ゲザング(歌)]と総称していた。ここで歌曲と呼ぶのは基本的にピアノ伴奏によるもので、ベートーヴェンは100曲近く残している。このほか弦楽や管弦楽伴奏による独唱

曲が5曲残されている。

ベートーヴェンが残した約100曲の歌曲のテキストの中には作詞者不詳の作品が9曲ある。ベートーヴェンが選んだ詩人はアマチュアから友人まで含めると39名に及ぶが、作詞者の明記されているおおよそ90曲の中でも最も多く取り上げられているのがゲーテの詩である。ゲーテの詩では10曲が残されている。ベートーヴェンの歌曲を詩の面からみると、おおむね3つの方向性がみられる。まず1つ目は、ボン時代に身に付いた、自由・平等・博愛を尊重し生命力あふれるもの。特にゲーテの作品に多くみられる。次に、つつましい生活の中で、若い青年の恋愛が書かれた庶民的な内容。そして最後は、マッティソンなどにみられる道徳的人生観が強いものである。

ウィーン初期に作曲された《アデライデ》は、描写的表現法が取り入れられ、音楽と詩の内容が深く結び付くとともに自由な表現によって、18世紀末までにはなかった新しい歌曲表現が生み出されている。また、1816年に作曲された《遙かなる恋人に》が声楽史上はじめての連作歌曲である。その詳細は次回述べるとするが、シューベルトの《美しき水車小屋の娘》や《冬の旅》に先行する作品であり、曲数こそ6曲と少ないが、連作性が強く全体で完結するひとつの作品である。こうした意味でも、《遙かなる恋人に》は真の意味での[Liederkreis リーダークライス]と呼べる作品である。後に出てくる各曲で完結する連作歌曲とは異なる作品であることは間違いない。上記に述べたことから、ベートーヴェンは詩と音楽の両面で1本化した連環性を意図した新しい形式を生み出したといえる。この《遙かなる恋人に》に関しては、また別の機会に論ずることとする。

ベートーヴェンが歌曲で大作が少ないのは、年代を追うにしたがって旋律美ではなく、器乐的作曲技法の中にベートーヴェンの真価を見いだそうとしたからである。初期から中期にかけては美しい旋律をもつ《アデライデ》や《君を愛す》などを作曲している。しかし、美しい旋律をそれに伴う和声で作品を作りだすことから、主題や動機を巧みに労作、展開することによって、他の追従を許さない、ベートーヴェン独自の世界を作り出すことに重きをおいたからであろう。そして、ベートーヴェンのどの声楽作品をとっても、その生きた社会とベートーヴェンの立場、意思が反映され、その個性が十分に発揮されている。

### 3. 歌曲の楽曲分析

今回は、ベートーヴェンの歌曲の中でとりわけ演奏させる機会が多い4曲を取り上げることとする。

#### (1) 《アデライデ Op.46》 詩：マッティソン

“Adelaide”

この曲は1794年から95年に作曲されたとされる。この曲を作曲した頃のベートーヴェンはまだ作曲を勉強中で、対位法の大家であるアルブレヒツベルガーの元で学んでいる頃とされる。1797年2月に初版では「ピアノ伴奏と独唱のためのカンタータ」という標題で

ウィーンのアルタリア社から出版され、人気を博す。しかし、この時はまだ作品番号をもっていなかった。作品 46 というのは後で付けられたものである。第 2 版では、ドイツ語の詩と共にイタリア語の訳詩が、第 3 版ではフランス語の訳詩が併記され、広く受容された。1800 年に詩人のマティソンに献呈される。しかし彼はその際、何もベートーヴェンに伝えなかったとされている。その後、1815 年にマティソンの詩集が刊行された際、彼はベートーヴェンの《アデライデ》に、以下のように述べている。

“この小さな抒情的なファンタジーは、多くの作曲家によって作曲されたが、歌詞に対する旋律が、十分なる度合いをもって作者を感動させたのは、天才的な、ウィーンのルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン氏だけであった(1815 年出版「マティソン詩集第 1 巻」)”

※属 啓成、『ベートーヴェン 作品篇』(音楽之友社、1970 年、668-669 頁)

この作品は、青春の情熱と愛情、そして悲哀をうたっている。ベートーヴェンの初期を代表する最も優れた作品であり、今日での非常によく演奏される作品でる。

・ 2 分の 2 拍子 変ロ長調。少し緩やかに

Einsam wandelt dein Freund	春の庭の中を、君の恋人は
im Frühlingsgarten,	一人で散歩している
mild vom lieblichen	優しく魅惑的な光に
Zauberlicht umflossen, das durch	柔らかに包まれながら、
wankende Blütenzweige zittert, Adelaide!	花のついた小枝は揺れている。アデライデ!

In der spiegelnden Flut, im Schnee	鏡のような高潮の中に、
der Alpen,	アルプスの雪の中に、
in das sinkenden Tages Goldgewölken,	暮れゆく金色の雲の中に、
im Gefilde der Sterne strahlt	広い星空の中に、君の姿が
dein Bildnis Adelaide!	輝いている。アデライデ!

Abendlüftchen im zarten	夕方のそよ風で
Laube flüstern,	柔らかな木の葉が囁き、
Silberglöckchen des Mais	五月の小さな銀鈴が
im Grase säuseln,	草で鳴いているよ。
Wellen rauschen	泉の木は音をたて
und Nachtigallen, flöten,	ナイチンゲールが囀っているよ、
Adelaide!	アデライデ!

Einst, o Wunder!	いつか 奇跡を!
entblüht auf meinem Grabe	私の墓の上に花よ咲け

eine Blume der Asche meines Herzens;  
deutlich schimmert  
auf jedem Purpurblättchen : Adelaide!

私の心の灰が一輪の花となれ。  
紫の小さな花々の上で  
輝いている。アデライデ!

恋人アデライデを、アルプスの大自然のなかで称える歌曲である。第4節からなる詩で、第3節まではラルゲットで穏やかに歌われるが、第4節は、極めて速く華やかに歌われる。調性は、第1節は変ロ長調だが、第2節でへ長調となり、ピアノ伴奏も、3連符アルペジオの穏やかな動きから(譜例1)、音域が広くなり、より壮大な音楽へと広がっていく。そして、第3節では変ニ長調から変ト長調へ転調する。その間に変ロ短調の響きがあり、より第4節の変ロ長調が華々しく感じられる。最後には「アデライデ」と呼び続けられるところが印象的である(譜例2)。ベートーヴェンの歌曲作品の中では最も壮大な1曲である事は間違いない。この作品には描写的表現法が取り入れられ、音楽と詩の内容が深く結びついている。その自由な表現によって、18世紀末にはまだみられなかった新しい歌曲の可能性を切り開いた作品である。

(譜例1)

4  
dolce e *p*  
Ein - sam

7  
wan - - delt dein Freund im Früh - lings - gar - ten, mild vom

(2) 《君を愛す WoO 123》 詩：ヘロッセー

“Ich liebe dich”

この曲は 1797 年頃に作曲、1803 年にウィーンのトレグ社から出版される。原詩の題は「やさしい恋心”Zärtliche Liebe”」であるが、今日残されているベートーヴェンの直筆の楽譜や初出版譜には原詩の第 2 節からが書かれており、その第 2 節の冒頭が「君を愛す”Ich liebe dich”」であるため、この表記名で親しまれている。ともに苦労を分かち合った 2 人の愛の歌である。

・ト長調。4 分の 2 拍子。ほどよくゆっくりと

Ich liebe dich, so wie du mich, am Abend und Morgen, noch war kein Tag, wo du und ich nicht teilten unsre Sorgen.	君が僕を愛してくれたように、 僕も君を朝も、夜も、愛している。 君と僕が、憂いを 分かち合わなかった日は一日もなかった。
Auch waren sie für dich und mich Geteilt leicht zu ertragen ; du tröstetest im Kummer mich, ich weint' in deine Klagen.	そして、その思いは僕と君にとって 分かち合うのは簡単であった。 君は、悲しみの中の僕を慰めてくれた。 僕は、君の嘆きに泣いた。
Drum Gottes Segen über dir, du meines Lebens Freude. Gott schütze dich, erhalt dich mir, Schütz und erhalt uns beide!	だから、神の恵みが君にありますように、 君は僕の人生の喜び。 神よ、彼女を守り、傍においでください。 そして、私たちを守り、お支えください。

歌い出しの長 6 度の跳躍が非常に難しく、緊張を強いられるはじまりである(譜例 2)。またピアノの分散和音による単純な伴奏であるため、旋律のフレーズ感や、言葉の語感が際立つ作品である。奏者は極めて丁寧な演奏を心がけなければならない。なお、第 2 節(原詩では第 3 節)の「ich weint in deine Klagen.」の「weint(泣いた)」の装飾部音符は、言葉の通り、涙を流す表現の利用として、楽譜の通り採用するほうが良い。しかし、「Klagen(嘆き)」では、長母音を活かすため、装飾部音符は採用しない。しかし、音楽の流れが自然になるよう考慮し、A 音ではなく H 音で歌唱するほうが効果的な演奏になると筆者は考える。

またこの作品は、様々なテンポで演奏されるが、今回は比較的ゆっくりの演奏とする。その理由として、若い恋人が歌った歌ではなく、何年も時間をともに過ごした、愛し合う 2 人の歌だからである。これまでの人生を懐かしみ、愛しみ、最後の願いとして神に祈る歌と解釈したからである。

(譜例 2)

Ich lie - be dich, so wie du mich, Am A - bend und am

(3) 《口づけ Op.128》 詩：ヴァイセ

“Der Kuß”

この曲は、1798年に完成するが、その後1822年に手が加えられる。アリエッタと表記され、小さなアリアとして作曲される。1825年にマインツのショット社によって出版される。この時は作品番号が121とされていたが、同年の1825年に作曲した作品と重なっていることに気づき、後に128に直される。またこの作品が完成した頃は、晩年の《交響曲第9番ニ短調》などの宗教曲の作曲に余念のない時であった。

・イ長調。4分の3拍子。アレグレット

Ich war bei Chloen ganz allein  
und küssen wollt' ich sie :  
jedoch sie sprach,  
sie würde schrei'n,  
es sei vergebne Müh.

僕は、クローエの元に一人で行った。  
僕は、彼女に口づけしようとしたんだ。  
だけと彼女は、  
「声を立てるわよ、  
無駄、骨折り損よ」だってさ。

Ich wagt es doch, und küßte sie  
trotz ihren Gegenwehr.  
Und schrie sie nicht?  
Jawohl, sie schrie :  
doch lange hinterher.

僕は、彼女に口づけをした、  
彼女の抵抗をもものともせず。  
彼女が叫ばなかったかって？  
うん、そうさ、叫んだよ。  
でも、ずっとずっと後にね。

可愛らしい前奏に続いて、彼の浮きだった様子がイ長調で表現される(譜例3)。その後、クローエへの抵抗部分から、口づけをするところまでの中間部分をホ長調で表現される。その後、再びイ長調に戻って、「叫んだのは、ずっとずっと後にね」と終曲される。ベートーヴェンの作品にしては、大変珍しくユーモアに溢れた作品である。

(譜例 3)

The image shows a musical score for a piano piece. It is in 3/4 time and D major. The first system consists of two staves. The treble clef staff begins with a piano (*p*) and dolce marking. The bass clef staff has a 4-measure rest in the treble clef. The second system also has two staves. The treble clef staff has a 4-measure rest. The bass clef staff begins with a crescendo (*cresc.*) marking. The music is written in a simple, lyrical style.

(4) 《想い WoO 136》 詩：マティソン

“Andenken”

この曲は 1809 年に作曲される。「アデライデ」と同じ詩人マティソンによるものです。1810 年にライプツィヒのブライトコップ・ウント・ヘルテル社によって出版される。この頃のベートーヴェンは、愛を歌った歌曲を多く作曲している。この作品もマティソンの愛する人を想う詩が選ばれている。変奏有節形式をとっており、第 3 節まで「僕は君を想う”Ich denke dein, ”” という詩で、同じ旋律を歌う。ブルンスヴィック家の長女テレゼと次女ヨゼフィーネに献呈。

・ 8 分の 6 拍子。ニ長調。ゆっくり動きをもって

Ich denke dein,

wenn durch den Hain der Nachtigallen

Akkorde schallen!

Wenn denkst du mein?

Ich denke dein

im Dämmerchein der Abendhelle

am Schattenquelle!

Wo denkst du mein?

僕は君を想う

ナイチンゲールの囀りが森を抜けて

響き渡る時に!

いつ君は僕を想ってくれるのかい?

僕は君を想う

明るい夕方の光に照らされた

木陰の泉のほとりで!

どこで君は僕を想ってくれるのかい?

Ich denke dein  
mit süßer Pein,  
mit bangem Sehnen und heißen Tränen!  
Wie denkst du mein?

僕は君を想う  
甘い痛みと、  
不安な憧れと、熱い涙を流しながら！  
どんなふうに君は僕を想ってくれるの？

O denke mein,  
bis zum Verein auf besserm Sterne!  
In jeder Ferne  
denk' ich nur dein!

ああ、僕のことを想ってほしい、  
より素晴らしい星の上で結ばれるまで！  
どんなに遠くても、  
僕が想うのは君だけだ！

簡潔にまとまった作品となっている。爽やかな愛の歌である。決して強くは迫ってこない、可愛らしい若者の愛の歌である。繰り返される「Ich denke dein(僕は君を想う)」(譜例 4)を、決して同じように歌うことなく、希望、憩い、甘酸っぱい痛み、とそれぞれの感情が表現されるように歌唱しなければならぬ。また、第1節では「Wenn denkst du mein?(いつ君は僕を想ってくれるのかい?)」の「Wenn(いつ)」は現在使われることのない古語であるため、近年では、「Wann」と歌唱されることが多いが、今回は原版のとおり「Wenn」で歌唱するものとする(譜例 5)。第4節では、情熱的になりつつも、優しさと愛情が溢れる歌唱でありたいと願う。

(譜例 4)

Musical score for 'Ich denke dein, wenn du'. The score is in G major (one sharp) and 4/4 time. It features a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line starts with a whole note 'Ich', followed by a half note 'den', a quarter note 'ke', a half note 'dein,', and a quarter note 'wenn' with a fermata. The piano accompaniment consists of a steady eighth-note pattern in the right hand and a bass line with chords in the left hand. A piano dynamic marking 'p' is present at the beginning of the piano part.

(譜例 5)

Musical score for 'Wenn denkst du mein? wenn,'. The score is in G major (one sharp) and 4/4 time. It features a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line starts with a whole note 'Wenn', followed by a half note 'denkst', a quarter note 'du', a half note 'mein?', and a quarter note 'wenn,' with a fermata. The piano accompaniment consists of a steady eighth-note pattern in the right hand and a bass line with chords in the left hand. A piano dynamic marking 'p' is present at the beginning of the piano part.

#### 4. おわりに

今回の研究により、ベートーヴェンの歌曲がいかに優れた作品たちであるかを実感することができた。また、彼の生涯と歌曲を併せて研究できたことで、彼が非常に愛情深く、優しい人間であったことが理解できる。「不幸で孤独な天才」とい一面だけでなく、愛に満ちた人生の中でその生涯を終え、器楽作品だけでなく、歌曲はじめ声楽作品への愛着も十分にうかがい知ることができたことに大きな成果を実感している。

また、今回の研究では取り上げることができなかった、連作歌曲集《遙かなる恋人に》を今後研究することで、さらに彼の声楽作品への探求に繋がりたいと考えている。そして、シューベルトやシューマンなど、声楽作品を書いた作曲家に、彼が与えた大きな影響を引き続き研究することで、筆者自身の専門分野の技術向上へと繋げていきたいと考えている。

#### 【参考文献】

- 平野 昭 (2012年) 「ベートーヴェン」 音楽之友社
- 堀内久美雄 (2008年) 「作曲家別名曲解説ライブラリー ベートーヴェン」 音楽之友社
- 青木やよひ (2007年) 「ベートーヴェン〈不滅の恋人〉の探求」 平凡社
- 喜多尾道冬 (1987年) 「19世紀のドイツ・リート ―その詩と音楽―」 音楽之友社
- 属 啓成 (1970年) 「ベートーヴェン 作品篇」 音楽之友社
- 近衛秀磨 (1970年) 「ベートーヴェンの人間像」 音楽之友社
- 大築邦雄 (1968年) 「ベートーヴェン 大音楽家 人と作品4」 音楽之友社